

2016 Pacific Energy Summit に参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

6 月 22～24 日、シンガポールにおいて、2016 Pacific Energy Summit が開催された。同会議は、米国のシンクタンク、National Bureau of Asian Research が主催するもので、2009 年に第 1 回サミットが東京で開催されて以来、ジャカルタ、ハノイ、バンクーバー、ソウル、北京の順で開催され、第 7 回サミットが今年シンガポールで開催された。今年のサミットのテーマは、「Sustainable Future: Energy and Environmental Security in Times of Transition」というものであり、原油価格の低下・エネルギー市場の供給過剰、COP21 でのパリ協定合意、といった新情勢・転換期の下での、アジア太平洋地域のエネルギー課題について議論が行われた。会議では 6 つのセッションと、2 つのラウンドテーブル会合が行われ、登録ベースで約 120 名の参加者が米欧アジア諸国等から参集、活発な議論が行われた。以下では、今回の会議での議論において、特に印象に残ったポイントを整理したい。

今回のサミットにおいては、上述した新情勢の下でのエネルギー選択の在り方に関する議論に一つの重要な焦点が当たったが、その中でも、特に興味深かったのは、ガス・LNG の位置付けに関わる問題であった。IEA が「ガス黄金時代」のコンセプトを打ち出してから久しいが、現実には「黄金時代」が到来しているとは到底言えない。化石燃料の中で最もクリーンであり、供給安定性にも優れ、シェール革命の進行の中で豊富な資源の存在が確認されるなど、多くの利点が認識されているガスについては、今後ますますエネルギーミックスの中で大きな役割を果たす、との期待が世界的に高かった。ところが、ガスの需要が堅調に増大し続け、今後の見通しも明るいと見えるのは、まさにシェールガス革命の進行でガス価格が大幅に下落し、現在でも 100 万 BTU 当たり 2 ドル前後という水準で推移し続けている米国くらいであり、ガス需要の見通しに関しては、アジアでも欧州でも様々な課題がある、と言っても良い状況である。

何がガス需要の現状と将来について課題になっているのか。今回のサミットの議論では、様々な問題が議論されたが、大別すれば、ガスの価格競争力に関わる問題と、それに関連し、競合するエネルギーの将来に関わる問題があった。2014 年後半の原油価格下落で、アジアでは原油連動方式で決定される LNG 価格が大幅に下落した。例えば日本の 5 月の LNG 平均輸入価格は 5.89 ドル/100 万 BTU となっている。また、世界的なガス・LNG 需給の緩和の中で、需給状況を反映する LNG スポット価格はそれ以上に下落し、直近では北東アジアの指標で 5 ドル前後となっている。当然、こうした低価格は、ガスあるいは LNG の価格競争力を高め、需要を刺激するのではないかと、この見方があるが、現実には必ずしもそうっていない。その最大の原因の一つは、ガスと多くの場合、直接競合することが多い石炭の価格も大幅に下落しているからである。また、ガスの優れた環境特性を活用しようにも、例えば現時点では EU 市場で典型的に見られるように炭素価格が低く、その分を上乗

せしたとしても、ガスが価格競争力を有するにはなかなか至らない、という問題がある。これらの問題は、地域・国によって様々な差異があるものの、欧州でも、アジアでも多くの国において共通してみられる状況となっているのである。

もう一つ重要なポイントは、様々な市場ファンダメンタル・政策・制度設計等に関わる側面を背景に、ガスにとって強力な競合エネルギーが複数存在・浮上している、ということである。第1には、上述した通り、現時点で価格競争力に優れ、特にアジアにおいて豊富に賦存する石炭の存在がある。経済成長に伴う電力需要の増大が予想されているアジアの多くの国においては、競争力あるベースロード電源としての石炭への期待は高く存在し続けている。もちろん、気候変動対策や大気汚染対策で、石炭利用の抑制を図る動きが世界大で進み、アジアも決してその例外ではない。しかし、市場の現実の中で、石炭との直接の競争に晒されるガスにとって事態は決して容易では無い。また、電力市場の自由化が進められる国においては、競争力ある電源を確保することはより喫緊の課題であり、その状況下、石炭が選好される事例も、わが国を含め多く見られる現実の事象である。

また、アジアでは原子力の存在も無視できない。世界最大のLNG輸入国である日本では、原子力再稼働の状況によって、ガス需要は大きな影響を受ける。アジアでは、中国・インドを始め多数の原子力発電計画が進められており、この進捗もガス需要の伸びに影響を与えよう。もちろん、逆に原子力が計画通り進まない、あるいは何かのトラブルが発生するような場合、ガス・LNG需要がその代替として拡大する可能性にも留意する必要がある。

もう一つ、今回の議論で興味深かったのは、再生可能エネルギーとガスの関係である。アジアでは、太陽光・風力の拡大は、中国等を除けば、またこれからという端緒に着いた状況である場合が多いが、いずれの国も積極的な政策支援で再生可能エネルギーを推進する計画を有している。本来、間歇性の高い再生可能電源と需給変動調整機能に優れたガス火力発電所のマッチングの重要性を指摘する見解もあったが、欧州等の事例を見ると、大量の再生可能電源が競争的電力卸売市場に流入すれば、卸売電力価格が下落し、メリットオーダーの関係でガス火力発電がプッシュアウトされる、そしてその結果ガス需要が減少する、という事態が発生している。今後、アジアでも再生可能エネルギーが大きく拡大していことは、潜在的にガス需要との競合がより強く出てくるのではないかと、という議論が行われた。興味深いことに、これらの競合状況は国によって異なるが、日本は、石炭、原子力、再生可能エネルギーの全てに上述の状況が当てはまり、それだけガス・LNG需要の将来に不確実性を作り出しているともいえる。

優れた特性を持つガスが、より大きな役割を果たし「黄金時代」を迎えるためには何が今必要なのか。基本的には如何に価格競争力を高めるか、という問題があり、そのためには、炭素価格の活用をどう図るか、という視点も必要になろう。また、ガスの利便性や全体としての競争力を高めるためには、より柔軟性を有し機能するガス市場を整備していくことも重要という議論があった。それを通じて、ガスの供給セキュリティ向上にも資する、という論点もある。また、究極的には、市場に関わる制度設計や規制など政策的な取り組みが不可欠なのではないか、との見方もありうる。ガスを含め、エネルギーのベストミックスには、常に市場力学に頼るだけでなく、適切な政策の関与が必要、ということなのだろう。

以上